

## 第9章 社会貢献

### (社会への貢献)

B群・社会との文化交流を目的とした教育システムの充実度

- ・公開講座の開設状況とこれへの市民の参加の状況
- ・教育研究上の成果の市民への還元状況

#### 1. 目的

社会貢献に対する本学の考え方は、本学が発足したときの学科設置の趣旨の中で、「地域社会の産業・文化の発展に寄与することを目的とし、社会的に重要性を増してきた文化人類学、臨床心理学における人材の育成および学術・研究の成果の社会への還元を目的とする。」に、見ることができる。

又、2004年度に開設した現代社会学科は、現代社会に潜在する諸問題に果敢に解決を挑む人材の育成を目的として設置されており、専門科目にはNPOなどの社会貢献をおこなっている組織での実習や、裁判所や行政機関等の公的機関を通じ社会貢献の実態をつかむ実習等が配置されている。教員陣容についても社会学分野の専門教員の他に、社会での実務経験の豊富な教員を配置している。

これらの目的にそって本学では、社会に有用な人材の育成はもとより、教員個々の研究活動の成果を地域社会に還元すべく、諸々の場面において地域との交流を積極的に進めるように努めている。

#### 2. 現状

##### (1) 地域・社会との連携・協力

#### 文化人類学科

文化人類学科では、グローバル化した今日においてこそ、ローカルな現場で生き抜く力を養い、現実の社会に根ざした発言ができる人材育成の必要性を認識し、教員・学生ともに学外で地域の人々とかかわるプロジェクトなどに積極的に参加している。

##### 1) 教員の地域との交流活動

京都府や宇治市などや地域社会からの要請に応え、文化人類学研究者としての立場からプロジェクトのメンバーや、委員会のメンバーとして、宇治市における教育の国際化を推進する委員会、文化財保護委員、宇治市総合計画審議会委員、産官学連携システム研究会委員などに参加している。

##### 2) 学生のフィールドワーク実習を通しての地域との交流

文化人類学科の中心的科目にフィールドワーク実習がある。これは国内外を問わず、各地域の情報を「現場」で獲得し、地域の人とともに行動し、考えて、問題点を探り、「現場」の状況に対して具体的な方策を提示しうるようなカリキュラムが体系化されている。当該社会の既存の価値に縛られず、より広く人間の可能性を見だし、地域の人々の幸福や福祉のために提言し、問題発見能力、調査・研究力、環境適応力、柔軟でユニークな発想力の涵養を目指した実習である。「地域で学び」、「地域で育てられ」、「地域と共生する」フィールドワーク実習の成果が地域からも評価されており、1998年から2004年までの7年間に70回以上の実績を海外や国内で有している。海外実習では、「エチオピアに小学校を作る」というプロジェクトを立ち上げ、近隣の地域の人々に訴えかけるとともに、エチオピアでの活動ははじめ、大学、研究施設、NGO・NPO、地方自治体、民間団体などとの交流を深めている。

また、国内の市町村との連携では、丹後地方において文化資源の発掘と調査を行い、他大学の学生とともに現地での研究成果発表会に参加している。富山県福岡町での「つくりもんまつり」の調査では学生も作品を作って参加し祭りの活性化に協力し、今では福岡町より実習調査の依頼を受けている。

### 3) 教員・学生の実習以外での関わり

大学と宇治市歴史資料館、宇治橋通り商店街、その近隣地域とで「地域まるごとミュージアム」構築のためのプロジェクトを2003年からはじめた。商店街理事会と協働した個性店作りプロジェクトのために、学生は各店主へ聞き取り調査し、ホームページを作成した。また、地域の地蔵調査の成果を地元の人々と共有するために、「地蔵作りワークショップ」や「地蔵スタンプラリー」などの学生のユニークな発想を生かした企画を、商店街の「文化フェスタ」に提案し実行している。さらに、博物館学芸員課程の受講生が中心になり、歴史資料館から借り出しを受けている行燈を使って「灯りのプロジェクト」を企画した。文化フェスタでは「行灯作りワークショップ」を開催し、参加者は割り箸と和紙で自分の行灯を作り、商店街の通りに並べて灯を入れた。大学で開催した展示では地域の書道家と行灯班とのコラボレーションを行い、地域の人々に呼びかけて来場を促している。

## 臨床心理学科

臨床心理学科では、人間関係を取り結ぶ能力を育成し、他者を尊重することのできる技能・知識を身につけることを重要視しており、その為の教育の一環として教員の指導のもとで、ボランティア活動を積極的に学生達に勧めている。代表的なものとして次のような活動が挙げられる。

### 1) 宇治市教育委員会 メンタルフレンド事業

1997年度よりおこなわれている不登校児童生徒の家庭訪問活動であり、毎年8名の学生が10数名の児童生徒の家庭訪問を行い不登校児童生徒への援助をおこなっている。本学教員がスーパーヴァイザーとして宇治市の委嘱を受け、学生の募集・推薦・指導にあたっている。この活動により、多くが改善の方向へ向かっている（市教委による統計もあり）。また、この活動に参加した学生による研究論文も書かれている。

### 2) 宇治市リフレッシュ教育相談事業

宇治市の不登校対策の中核となる事業で、学校教員に対し臨床心理士である大学教員がコンサルテーションを行っている。1999年度から本学臨床心理学科教員が参加していた。この事業は、スクールカウンセラー制度へ発展的に統合され、2004年度で終了している。

### 3) 京都市教育委員会 適応指導教室「ふれあいの杜」学生スタッフの派遣

1999年度から、不登校児童生徒を支援するための適応指導教室に、学生ボランティアスタッフ(2004年度現在は、20名程度)を派遣している。本学教員が、学生の募集・推薦を行うと共に、京都市教育委員会がおこなうミーティングにも参加している。

2004年度からは、臨床心理学科、香川克助教授がアドバイザーとしての委嘱され、学生の指導に加え、常勤・非常勤職員へのアドバイスやシステムへのアドバイスをするようになっている。

構造改革特区による不登校生徒対象の中学校（洛風中学校）が開設されるなど、市の不登校対策事業が大きく転換していく流れの中で、心理臨床的な方向性を身につけている学生の活動が評価されている。

### 4) 滋賀県教育委員会 森のオアシスセミナーへのスタッフ学生派遣

1999年度より年3回行われる4泊5日の不登校児童生徒親子キャンプに、学生スタッフを派遣して

いる。本学教員もキャンプに参加し、学生の指導や教育委員会へのアドバイス、親との面接などを行っている。心理臨床的なきめ細かな関わりによって、参加者や教育委員会から高く評価されている。

5) 「助け合いの子育てネット」主催 ママさんサポーター活動への学生サポーター派遣

2003年度より、3歳未満の乳幼児を抱えておられる専業主婦をサポートするために学生が家庭を訪れ、母親と話をしたり、乳幼児と遊んだり、育児補助（オムツ替えや食事の世話など）をしたりすることを定期的（週に1回2時間）におこなっている。本学教員が「助け合いの子育てネット」代表者であり、大学院生以上がスタッフとしてかかわっている。現在子育て中の母親たちと、また将来、親になるであろう大学生たちがお互いに役に立ち、助け合っていることが高く評価されている。

**現代社会学科**

宇治市との産官学連携活動として、2004年11月「産学官連携システム研究会」が発足した。当面の目的を、宇治市・大学・市民団体が共同で産学官連携システムの構築に向けて調査・研究をおこなうこととし、 榎島まち作り部会、 産業振興部会、 産学官連携システム部会を設け進めることになっている。メンバーは、京都文教大学教員・宇治市職員・宇治市産業関係団体・地域住民で構成されている。

(2) 公開講座等の開催状況

大学の知的資産を社会に還元すると共に、地域社会に根ざした大学であることを目的として、本学の付置施設である人間学研究所、心理臨床センターを中心に各種公開講座が提供されてきたが過去2年間の実施状況は次の通りである。

**人間学研究所**

No	実施日	時間	聴講者数	講演者	メインテーマ	サブテーマ	所属等
1	2003.1.31	18:00-20:30	71名	岡崎 彰	夢は『自然』か『文化』か	ステージのある社会の事例から人類の夢のナゾを考える	神奈川大学助教授
2	2003.5.23	18:30-20:30	98名	石毛 直道 米山 俊直 田中真砂子	特別シンポジウム「京都と文化人類学」	日本唯一の文化人類学科の挑戦と未来	前国立民族学博物館館長 大手前大学学長 前京都文教大学教授
3	2003.9.19	13:00-15:00	約30名	鵜飼 正樹	「異文化としての内なる『老い』」公開講演会	本学が誇る異能教員・老人ホームのスーパー・アイドル 南條まさきと老人ホームに行こう!	本学人間学部助教授
4	2003.12.19	18:10-20:30	約30名		「文明から野蛮へ」特別上映会	Bowling for Columbine	監督: Michael Moore
5	2004.1.16	17:00-19:00	33名	米山 俊直	アフリカ都市研究 事始め	1960年代に始まったアフリカ都市研究の40年をかえりみる	大手前大学学長
6	2004.2.27	13:00-16:00	約20名	高石 浩一 平岡 聡	「異文化としての内なる『老い』」公開研究会	臨床心理学の老い 仏教における老い	本学人間学部教授
7	2004.2.27	18:00-20:00	44名	栗本 英世 野田 正彰 松田 素二	『文明と野蛮』公開講演会 「文明から野蛮へ」	アフリカの内戦(の残虐性) 近代戦争の虐殺のトラウマについて コメンテーター	大阪大学大学院教授 京都女子大学教授 京都大学大学院教授
8	2004.3.11	18:00-20:00	約20名	吉田 健次	「学園ミュージアムを考える」公開講演会 「学園ミュージアムを考える」研究班	世界の博物館の現在	国立民族学博物館
9	2004.6.24	18:00-20:00	23名	烏雲格日勒(ウユゲリル)	遊牧から定住へ	中国東北モンゴル族の文化変容	人間学研究所客員研究員
10	2004.10.29	17:00-19:00	33名	篠原 聡子	個をつなぐ住まい「ユウウツの未来像」研究班	"住む"側の実験と"建てる"側の実験	建築家・空間研究所主宰 日本女子大学家政学部 住居学科助教授

11	2004.11.26	18:30-20:30	約30名	坂本 博司	地域とむすぶミュージアム活動の試み 「学園ミュージアムを 考える」研究班	地域・大学・資料館 - 「まるごと」の2年 をふりかえりながら -	宇治市歴史資料館主任
12	2005.1.11	16:30-20:00	学内	森 達也 信田さよ子 坂上 香	『Lifers』を観る、 『Lifers』を語る	公開上映会 + シンポジ ウム	映画監督/ドキュメンタリー作家 原宿加代子/センター所長/ 臨床心理士 京都文教大学助教授

## 心理臨床センター

心理臨床センターでは、心理臨床にかかわる専門家に対するスーパーヴィジョン、研究会の開催および一般社会人を対象とした講演会や公開講座をおこなっている。

No	実施日	時間	聴講者数	テーマ	講演者
1	2003.10.26	12:0~17:00		21世紀の精神分析と日本	フレッド・バイン博士(米 アルバート・アインシュタイン医科大学教授・20行 アイソソフィ教育分析家)
2	2004. 1.31	13:3~15:00		人生後半の知的・人格的発達と老人の智慧について	進藤貴子(川崎医療福祉大学)
3	2004. 2.14	13:3~15:00		老いを生きる：いのちの輝く時	樋口和彦(本学学長)
4	2004. 2.28	13:3~15:00		老人の力	藤見幸雄(藤見心理面接室)
5	2004. 3.14	13:3~15:00		介護家族のケア	黒木賢一(大阪経済大学)
6	2004. 9.21	10:0~17:00		Authentic Movement	バーバラ・オライリー(心理臨床家)
7	2004. 9.25	10:0~11:30		「心理臨床センター公開セミナー・聴講者向け 伊養成講座」 カウンセリングのツボ	濱野清志(本学教授・心理臨床センター所長)
8	2004.10. 2	10:0~11:30		同上 心に寄り添う聴き方	越智浩二郎(本学教授)
9	2004.10. 9	10:0~11:30		同上 インタビューの実験	加藤博史(龍谷大学短期大学部教授)
10	2004.10.16	10:0~11:30		同上 ワーク形式で講座の振り返りと活動 場面の紹介・コンタクト・その活動の説明	谷崎綾子(宇治市ボランティア活動センター) 亀井清司(NPO 法人かわせみ副理事長) 清水芳美(宇治明星園白川川緑あさぎ園長)
11	2005.1.8	13:0 - 16:30		「日韓ひきこもり公開シンポジウム」 - 両国のひきこもりの現状理解 -	斎藤 環(精神科医) イ・シヒョン氏(精神科医・韓国) 上山和樹氏(『ひきこもりだった僕から』著者)

## 京都文教公開講座

京都文教学園創立 100 周年記念「仏教の可能性を探る」～仏教は 21 世紀に何ができるか～

戦争の世紀と言われた 20 世紀が終わり、21 世紀が新たに始まったが、アメリカでの 9.11 同時多発テロが、その最初の年に起きたことは、これからの人類の行方を考える上で象徴的な出来事であると考えられる。環境や教育の問題も一層深刻化する中で、人類は一体どこに向かおうとしているのか。山積みする困難な問題に対して、仏教にできることは何なのか、様々な分野における仏教の可能性を 21 世紀の初頭に探る。

	テーマ	講師	所属	月日	時間
1	仏教から 21 世紀に向けての提言～「自己の相対化」と「共生」を考える～	平岡 聡	京都文教大学教授	5月21日(金)	18:00 ～
2	密教の可能性～垂直・水平二軸の意義～	頼富 本宏	種智院大学学長	6月18日(金)	19:30
3	福祉と仏教～福祉の原点をさぐる～	安藤 和彦	京都文教短期大学教授	7月16日(金)	
4	仏教的ターミナルケアの可能性～いのちの看取りへの道～	神居 文彰	平等院・浄土院住職 京都文教短期大学非常勤講師	9月17日(金)	
5	心に響く仏の声～日々の仏縁をいただいで～	安本 義正	京都文教短期大学教授	10月1日(金)	

6	幼児教育における仏教の可能性～保育・教育の中の仏教語～	照屋 敏勝	京都文教短期大学教授	10月22日(金)	
7	模索する韓国仏教～キリスト教の攻勢に抗した生き残り戦略～	安田 ひろみ	京都文教大学助教授	11月19日(金)	
8	21世紀の浄土教～その普遍性～	伊藤 唯真	京都文教短期大学学長	12月17日(金)	

### 3. 点検・評価と今後の課題

本学の設置学科は、社会の日常生活に比較的身近な学問領域であり、主目的である斯学の人材育成は勿論のこと、それ以外に、学術研究成果の社会還元に対する期待は大きい。

宇治市との産官学連携活動については、まだ緒についてばかりであるがこの活動が描いている諸テーマについて、本学が寄与できる側面が多々あると思われる。今後課題形成されていく過程で各学科の積極的な交流が期待できる。

臨床心理学科の学生ボランティア活動については、利用者から喜ばれることはもちろんのことであるが、学生達にとっても不登校生徒や子育て中の母親および幼児と直接接することができたり、また肌で他者とコミュニケーションすることの難しさを知ることができ、教育意義は大きい。反面、これらの事業に携わる教員の負担が大きく、今後は教員へのサポート体制をどう構築していくかが課題といえる。

本学は開学してまだ10年足らずであり、地域からその存在が十分に認識されているとは言い難い。今後は、外からの働きかけを待つばかりではなく、それぞれの学科の学問特性を活かして何が社会に対し役立つか、自らニーズを掘り起こし、社会に積極的に提案し働きかけていくことが必要である。本学園は2004年に創立100周年を迎え、次なる時代に向かって新しく学園を社会にアピールしていくことが誓われ、学園としての広報活動も新しくスタートすることになり、新しく大学広報誌も発刊された。今後は、こういったツールを通じ、公開講座等を積極的に提案し社外への発信を積み重ねていきたい。